

第21突撃隊・第132震洋隊(土佐清水)

基地の特攻艇格納壕跡(2)

(1)第132震洋隊(土佐清水)基地ではどんな訓練がおこなわれていたか？

初めによくおこなっていた演習は、足摺半島周辺の地形や地物を確認するため、足摺半島一周の行軍を度々実施した。また、当時宿舎としていた清水小学校の校庭で棒地雷(長さ2メートルほどの棒の先に地雷を仕掛けて戦車にこれを投げつける兵器)による攻撃、基地周辺の対空監視の演習等をおこなっていた。

(2)敵機の攻撃を受ける！

昭和20年(1945)6月28日、午前9時30分頃、越港から清水港へ物資を移送中の大発(兵員や物資を輸送する幅広の底の浅い輸送舟)が尾浦沖1キロの海上で敵機による攻撃で沈没した。乗船していた3名の兵士の内、1名は死亡、2人が重軽傷を受けた。重症の兵士は、太腿を撃ち抜かれ、脚がびろびろの状態であった。手術によって切断して縫合すれば命は助かるかもしれないとの医師の判断で、設備も物資もない中を隊員も数名手術を手伝った。交替で脚の骨をノコギリで切り落とした。手術をおこなった施設は、当時の溝渕医院、現在の渭南病院であった。

同年7月28日午後3時頃、越湾内で震洋艇出動運転中(越湾で震洋艇の何隻かが訓練していた)に敵機・グラマン6機に機銃掃射を受けた。水しぶきが列をなして上がった。これにより震洋1隻は沈没、もう1隻は砂浜に座礁した。グラマンは現在の清水高校南側の高台に設置されていた見張り所すれすれに旋回して飛び去っていった。このときに整備隊の曹長が1名死亡した。

(3)玉音放送と集団自決の企図

8月15日、震洋隊兵士は、いつものように船尾作業をおこなっていた。震洋艇搭乗員は前日から出撃する準備を整えて待機していた。午前10時頃、伝令があり、「天皇陛下の重大放送のため、本日正午、部隊本部前に全員集合」の連絡を受けた。

正午に玉音放送が開始された。ラジオの感度が極めて悪く、陛下の声を聞き取ることができなかった。宿毛の第21突撃隊本部に確認すると、終戦の詔勅であることが分かった。このとき兵士全員に軽率な行動を慎むようにとの部隊長訓示があった。

その日の夕方、越浜に搭乗員全員が集合し、震洋に積載の弾薬で集団自決すること

が話し合われた。それを聞いた管頭重喜第三艇隊長は、真っ青になり越浜に走り、集団自決することを厳禁した。他の艇隊長も駆けつけ、このような時機に無駄死にすることは、今まで特攻隊員として築いてきた行動や苦労を無にするに等しい。その力を新しい日本の再建に最大限に発揮してこそ国に尽くす道ではないかと隊員たちを諭した。これにより集団自決は回避された。

写真は、市街地山手上空から撮影したものです。60年前（1945年）は湾が大きく陸地に入り込んでいました。見渡す市街の大半は、その後埋め立てて出来た土地です。

左側海に突き出した山を西牧山といい、この山裾にそって15カ所の壕が掘られています。



第132震洋隊の搭乗員。艇隊長の3人を除く搭乗員45人は平均年齢17歳の少年兵であった。

(4) 手結基地の大惨事

終戦翌日の8月16日午後7時頃、第23突撃隊本部(高知県須崎)から「敵機動部隊が土佐沖を航行中、直ちに攻撃すべし」との命令が発令された。これに応じ、手結の第128震洋隊も準備にかかった。震洋艇の試運転中に突然1隻から発火し、22艇が次々と爆発、搭乗員・整備員の111名が焼死した。翌17日になり、これが誤報であることが判明した。終戦後の混乱期であり、この事件は大きく取り上げられることもなく終息した。昭和31年(1956)になり、地元夜須町有志が浄財を集め、「震洋隊殉国慰霊塔」を建立し、毎年8月16日に慰霊祭を執りおこなっている。

(5) まとめ

清水中学校に在籍していた頃、夏休みの全校平和学習の担当をした。そのとき、今は亡き上杉利則先生を講師として招聘した。ちょうど岡崎哲也教育長が校長で在職されていたときの話である。上杉先生は、『土佐清水にも特攻基地があった 戦後59年洞窟の証言』の著者であり、ご自身も戦争体験をされていた。震洋特攻艇格納壕の保存やその教材化に尽力され、最期まで反戦教育に熱い思いを注がれていた。

高知県内で、土佐清水市内で戦時中にどのような動きがあったのか。どのような人々の営みがあったのか。できるかぎりこれらの歴史を明らかにしていくことが重要である。後世に伝えねば。それにしてもあまり時間が残されていない。最後まで探求の心を燃やししながら、前に前にと突き進んでいきたい。